

ブダペスト通信

盛田 常夫



2022年 NO. 9

2月8日

ELIOS 事件の OLAF 文書公開

オルバン首相にたいする冷たい対応

北京五輪スキージャンプ競技の失態

ELIOS 事件の OLAF 文書公開

ハンガリーの EU 補助金不正取得として、OLAF（欧州不正監視局、European Anti-Fraud Office）が調査したものに、二つの重要案件がある。一つは、ブダペスト地下鉄 4 号線建設をめぐる補助金詐取であり、もう一つがオルバン首相女婿ティボルツ・イシュトヴァーン所有の ELIOS 社による公道照明灯設置事業の補助金詐取である。この二つの詐取事件の詳細は、拙著『体制転換の政治経済社会学』（第 4 章 108-118 頁）に詳しく紹介した。

OLAF はこれら二つの案件について 100 頁を超える調査報告書を出しているが、その報告書は公開されていない。当該国の政府が公開しない限り、報告書の原文を見ることができない仕組みになっている。ブダペスト地下鉄 4 号線にかんする OLAF 報告書は Fidesz 政府が公開した。政権獲得以前の社会党政権時代の汚職事件だからである。政権政党の政治的思惑で公開された。ところが、Fidesz 政府は ELIOS 社の補助金詐取調査報告を公開しなかった。首相の女婿（長女婿）にかかわる事件だからである。この事件は公共放送でも一切報道されていない。

ELIOS 社事件の OLAF 報告書は一部のメディアに漏洩された結果、事件の概要は周知の事実になっている。私もこの情報にもとづいて、ELIOS 事件の基本的な内容を紹介した。

OLAF は調査文書を公開しない理由として、当該事件の調査が当該国で続いている場合が多いことを根拠にして、これを一般規則としている。これにたいして、ハンガリーの市民団体が国際的活動団体と共同で、欧州司法裁判所へ文書公開訴訟を行った。その結果、昨年 9 月に判決が出され、欧州委員会にたいして文書公開を命じた。その後、市民団体は欧州委員会にたいして、上訴せずに文書を公開することを求めた。最終的に欧州委員会は上訴せずに、ELIOS 報告書を請求者に公開することになり、本年 2 月初めに渡された。その英文書は、<https://atlatszo.hu/kozpenz/2022/02/07/az-eu-csalas-elleni-hivatala-nem-tud-megbirkozni-a-magyarorszagi-korrupcioval/> からダウンロードできる。ただし、公開された文書には黒塗りが多く、関与した人物の氏名はすべて黒塗りされて、分からないようにしてある。

OLAF は調査する権限を持っているが、犯罪を告発する権限をもたない。当該国政府に通知し、当該国の検察が捜査・告発することを求めるだけである。ハンガリー検察はすでに形式的な調査を終えて、犯罪性は見いだせなかったと結論している。ハンガリーの司法、とくに検察はオルバン首相の息のかかった人物（Polt Peter）が 2010 年から検事総長を務めており、Fidesz 政府は 2019 年にこの検事総長の任期をさらに 9 年延長する手続きを終えてしまっている。ELIOS 事件の補助金詐取がハンガリー国内で訴追さ

れることはない。オルバン首相はEU委員会からの批判を受け、EU補助金を受け取らないことを指示した。EU補助金の代わりにハンガリーの国家予算でオルバン首相の女婿の事業を賄うことになったのである。これを国家予算の私物化と言わずして、何と云おうか。

EU委員会は補助金不正受給が後を絶たないことから、各国の検察庁の上に立つ欧州検察庁の創設を目指しているが、ハンガリー政府はそれに加わらないことを明言している。この事例も、ハンガリーにおける「法の統治」の弱さの一例である。

オルバン首相にたいするプーチン大統領の冷たい対応が話題に

オルバン首相はモスクワ訪問を自画自賛しているが、ハンガリーのメディアではプーチンをヨイショしに行ったはずのオルバン首相が冷遇されたことを取り上げている。

一つは会談における両首脳の間隔である。オルバン首相とは長いテーブルの両端で会談が行われたが、打って変わって翌日のアルゼンチン大統領とは密な会談となった。マクロン大統領とは、オルバン首相と同じく、長いテーブルが使われた。明らかに、ロシア側は相手に応じて、会談の形式を変えていると思われる。



プーチン-オルバン会談

プーチン-フェルナンデス会談



プーチンーオルバン記者会見

プーチンーフェルナンデス記者会見

もう一つは、記者会見の立ち居と会見を終えた後の儀礼である。オルバン首相とプーチン大統領の距離は、会談テーブルと同程度に離れていた。ところが、アルゼンチン大統領との記者会見ではきわめて近い立ち居を取った。さらに、会見を終えたプーチン大統領はオルバン首相と握手することも、首相に付き添うこともなく、さっさと会見場を後にしてしまい、オルバン首相は主の去った壇上を一人で後にした。これにたいして、プーチン大統領はアルゼンチン大統領と握手を交わし、背中を押して一緒に会見場を後にしたのである (<https://youtu.be/GR3SoA5jg4U>)。

明らかに、この扱いはオルバン首相、いやハンガリーが見下されていることを示している。要するに、「俺が招待したわけではなく、お前の方からやってきた」という態度が明々白々だ。最初から足元を見透かされていた。朝貢外交の哀れである。日本のように経済力があれば、朝貢外交でも歓迎されるが、小国ハンガリーはこのような冷たい扱いを受ける。

北京五輪スキージャンプ競技の失態

スキージャンプ混合団体で女子選手に5名のスーツ失格者が出て、この競技を台無しにしてしまった。これは明らかに FIS（国際スキー連盟）の失態である。厳しいスーツ規制が存在するのは良い。問題はその運用である。競技を終えてから、「貴方の競技は無効です」と通告するのは興ざめである。まさに「後出しじゃんけん」である。問題は規則の運用にある。

スーツの厳格規制を行うなら、事前にスーツを審査して、使用するスーツに許可を与えるべきだろう。体格（体重や足回り、胴回り）が変化するなら、W杯が始まる前とシーズン中間時点で体格の測定を行い、その時点で許可されるスーツのサイズを選手ごとに決めるべきだ。五輪なら、すべての競技が始まる前に、使用できるスーツに許可証を与えるべきだ。その際に、寸法があっているスーツに認可マークを取り付ければ良い。

それをしないで、競技を終えた後に、ランダムに「貴方のスーツは規格外でした」というのはあまりに杜撰な管理である。一にも二にも、運用方法が杜撰である。日本スキー連盟は「規則は規則」という事なかれ主義で何もしないのではなく、運用改善を提案すべきだろう。日本のスポーツ連盟は国際化が遅れているから、こういうところが抜けている。

ジャンプ競技に男女混合団体という新たな競技が導入されたのは歓迎すべきだ。新鮮な視点でジャンプ競技を楽しむことができる。ただ、女子選手間のレベルの違いが大きく、女性選手の力関係で競技の勝負が決まる。女子選手強い国は上位に立つようになっている。だから、一つのジャンプが取り消されても、日本がカナダやロシアに肉薄することができた。それでも、普段は注目されないカナダや低迷が続いているロシアに、それなりのレベルを持った選手が出てきたのはジャンプ界にとって良いニュースである。

いかんせん、スキージャンプは誰もがができる競技でなく、子供の時から訓練していないとできない特殊な競技である。間違えば、命に係わる事故が起きる。大金を稼げるようなスポーツでもないから、競技人口がきわめて少ない。スイスのように、男子選手はいるが、女子選手がいない国もある。一昔前は、フィンランド、イタリア、フランスも男子団体を組んでいたが、近年は団体メンバーを組めない状態続いている。まして、男女混合となると、チームを組める国は10か国を超えることはない。その10か国の間でも、実力の違いはきわめて大きい。そのこともあって、混合競技は技術の差が広がるラージヒルの台ではなく、飛距離の差が小さいノーマルヒルの台が使われている。しかし、女子でもラージヒルの大会が主流になっているから、これからはラージヒルで混合競技が見たい。ラージヒルの場合にはさらに実力差が出てしまうが、見る者としては、こちらの方がジャンプのダイナミズムを堪能できる。

今次の五輪で初めて採用された混合競技で、強豪国のオーストリア、日本、ドイツ、ノルウェイの女子選手がスーツ違反に問われた。長いW杯の歴史で、一つの競技でこれだけ多くのスーツ違反が出たことはない。そのために、興ざめた競技になってしまった。わずかに、日本が踏ん張って、もう少しで銅メダルというところまで追い上げたのが見どころになった。

競技人口が少ないと、スポンサーを獲得するのも難しい。ドイツ、オーストリアだけでなく、五輪でメダルをとったカナダやロシアの企業がスポンサーになってくれば、賞金額を上げることができる。日本では人気がなく、日本企業がFISのスポンサーになっていないが、スキー競技は欧州で人気がある冬のスポーツである。多くの競技が

Eurosport チャンネルを通して放映されている。欧州に拠点をもつ日本企業が、もっと冬のスポーツのスポンサーになったらどうか。



プラニツァ・フライングジャンプ台

五輪後のW杯男子スキージャンプはフライング大会が多く組まれている。ラージヒルの倍近い距離を飛ぶスキーフライングは壮観である。ノーマルヒルの飛び出しは 87kmh 前後、ラージヒルのそれは 90kmh 前後だが、フライング台の飛び出しは 100kmh を超える。とくに 3 月末のW杯最終戦が行われるスロヴェニアのプラニツァ（Hill Size 240m）は、日本にとっても思いで深い台だ。1997-98 年のW杯総合優勝は最終戦まで、船木選手とペテルカ選手（スロヴェニア）の双方にチャンスがあった。最後の最後に、同僚の葛西選手のこの日のジャンプで優勝さえしなければ、船木選手がスロヴェニアのペテルカ選手をわずかに抑えて総合優勝が決まるところまで来た。ところが、フライングが得意な葛西選手がこの最終戦に優勝して、船木選手は総合得点 19 点差でペテルカ選手に次いで 2 位で当該シーズンを終えた。葛西選手が優勝しなければ、船木選手は総合優勝を手にするはずだった。なんとも消化しきれない運命のめぐりあわせだった。

船木選手も葛西選手もなしえなかった W 杯総合優勝は、小林陵侑選手が 2018-19 年のシーズンに達成した。小林選手はプラニツァジャンプ台の 252m の hill record を持

っている。今年は、フライングが得意な小林選手の二度目の総合優勝がみられる W 杯後半戦である。期待したい。